

ある日突然だったのですが、「Bさんは、どこで髪を切っているの？」と聞くと、「カミ…？ エット、ドコ？カットシタイヨ。デモ、ドコ…？」と、答えました。



Bさんとはインドネシア人の男性です。昨年から私が所属しているママさんバレーボールチームの練習に顔を出すようになり、一緒にバレーボールをしています。私はBさんが髪を束ね始めたのが気になり、それとなく聞いてみたのですが、「実は髪を切りたいと思っているが、どこへ行ったらいいのか分からずに困っている」ということだったのです。それを聞いたチームメイトが、「それなら・・・」と、いろいろ提案してくれたことで、その後Bさんの困り感は、あっさり解決することができました。

そんな出来事があってから、ふと、玉川大学 教授 大豆生田啓友（おおまめうだ ひろとも）氏の一言が思い浮かんできました。大豆生田氏は、乳幼児教育学、保育学・子育て支援を専門としている先生です。先生は、記事の中で、「サロンやひろばに『来ている親子は大丈夫』という見方を支援者がしては、その悩みや困りごとに気付いてあげられていない、つまり支援になっていない可能性があるのです」（『日本教育新聞』R2. 2. 10 付）と言っていたことを思い出しました。

今回のBさんとのやりとりは、よく考えてみると子育て支援というわけではありませんでしたが、大豆生田氏の言葉の裏側にある固定観念にとらわれないことが大切で、「もしかしたら、何か悩みを抱えているのではないか」「もしかしたら、困っていることがあるのではないか」と、支援者が意識することで、支援の輪が広がる可能性があるということを私に気づかせてくれたように思いました。

さて、Bさんはその後、体育館に時々友達を連れてくるようになったり、地域の行事にもチームメイトを介して参加したりするようになりました。更には、試合の時などは、私たちの応援にまで駆けつけてくれるだけでなく、なんとこちらの思いを察したのか、必要に応じて子守りまでしてくれるようにもなりました。最初は、私たちがBさんをあれこれ支援したつもりが、今では逆に私たちが支援されているという嬉しい展開になっています。

また、大豆生田氏は、「サロンやひろばが、地域での親子の安心できる居場所となるためには、その思いにしっかりと寄り添える支援者がいることが大切だ」とも言っています。確かに、アウトリーチ型の支援もとても重要ですが、サロンやひろばでのさり気ない「もしかしたら…」という支援者の意識こそが、そこに関わっている全ての方々の笑顔につながっていくこともあるのだらうと思いました。【A】

○メルマガで取り上げて欲しい内容やご感想など、下記アドレスにお寄せいただければ嬉しく思います。（アドレス登録又は配信停止もこちらからどうぞ(^_^)

mailto:kosodatem@pref.iwate.jp

○メルマガのバックナンバーを当センターHPで閲覧することができます。

アドレスはこちら

「まなびネットいわて」（<http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/>）>「発行物・刊行物」

>すこやかメルマガ

これからも、どうぞよろしく申し上げます(^_^)/

【発行】

岩手県立生涯学習推進センター

025-0301 花巻市北湯口2-82-13

TEL 0198-27-4555

URL:<http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/> 「まなびネットいわて」で検索